九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

[025]九州大学教育社会学研究集録表紙奥付等

https://hdl.handle.net/2324/6788243

出版情報：九州大学教育社会学研究集録. 25, 2023-03-15. Seminar of Educational Sociology Department of Education, Graduate School of Human-Environment Studiess Kyushu University
バージョン：
権利関係：

教育社会学概論II演習

本講義「教育社会学概論II演習」は、2022 年度春学期に学部 2 年生及び、それ以上の学年を対象に木村拓也教授の指導のもとに行われた。ただし、TA の大学院生の方や複数名の交換留学生の方も入り、様々な視点から授業の課題に対して更なる活発な議論が行われた。

今期の授業は事前に授業資料を各自で読み終わらせ、授業では司会者を一名たて、議論中心の授業形式で実施された。このような学生が主体となった授業形式をとることで、学生の社会学に対する考えをより深めることや、自分の考えを言葉にする力身に付けることが可能となった。

また今年度の授業で使われた教材として、而立書房出版の『社会学（第 5 版）』（原著：アンソニー・ギデンズ（1989）『SOCIOLOGY Fifth edition』,Polity Press）が使用された。

各回授業に取り上げられた資料と毎度授業の司会者の構成は以下のようになる。

4 月 15 日		オリエンテーション
4 月 22 日	4 限	「社会学とは何か？」（陣内）
5 月 6 日	4 限	社会的相互作用行為と日常生活」（岩山）
	5 限	社会化、ライフコース、加齢」（大石）
5 月 13 日	4 限	家族と親密な関係性」（室田）
	5 限	「社会成層と階級」（大石）
5 月 20 日	4 限	「貧困、社会的排除、福祉」（河野）
	5 限	「グローバルと不平等」（岩山）
5 月 27 日	4 限	「セクシュアリティとジェンダー」（室田）
	5 限	「人種、エスニシティ、移民」（河野）
6 月 3 日	4 限	「組織とネットワーク」（河野）
	5 限	「教育」（大石）
6 月 10 日	4 限	「犯罪と逸脱」（岩山）
	5 限	「社会の問いを発し、その問いに答える／社会学における理論的思考」（室田）

本講義は社会学にまるわる様々なことについて議論を行ったが、その中でも議論が盛んであった内容を二つ取り上げたい。

まずは、5 月 13 日の 5 限の授業で行われた「社会成層と階級」についての議論だ。

「社会成層」は社会学者が人間社会で個人や集団のあいだに見いだされる不平等について論ずる際に使われる言葉である。また、より単純な言い方をすれば、社会成層をさまざまな集団の間で構造化された不平等として定義づけることができる。この社会成層と階級に関する社会学的分析の基盤は、カール・マルクスとマックス・ウェーバーが展開した理論によって形づくられている

このような本書の内容を踏まえた議論では、どのような階級の分け方が適切であるのかについての議論や、そもそも「階級」の機能についての議論が行われた。その中で、階級がある故に平等を目指すと援助が必要となり、援助するためには、援助対象を区切る必要性があり、そのためには階級が必要であるというジレンマが発生することにも気づいた。議論の結論としては、階層を一概に「悪いもの」として扱うことはできず、階級自体も明確に分けることは困難で、グラデーションになっているのではないかという結論に至った。

もう一つは 6 月 3 日の 4 限の授業で行われた「組織とネットワーク」についての議論だ。

「組織」とは、身元が特定できる成員資格を備え、同じ目的を実現するために協調して共同行動に従事する集団のことである。近現代の組織についてはマックス・ウェーバーが最初の体系的解釈を示しており、人びとの活動や人びとが生産する財を時空間を超えて安定した形で整合するための方式であると論じている。また、社会学者は個人や集団を他の個人や集団と結びつける、あらゆる種類の直接間接の人的つながりのことを「ネットワーク」と称している。そして、この人とのつながりの中でもお互いの利益のために協力して、自分たちの影響力を拡大できるようにさせる知識や人的つながりのことを社会関係資本と言われている。

このような本書の内容を踏まえた議論では、組織について焦点が置かれていた。まず、フォーマルとインフォ

ーマルについての議論がなされた。そもそも、フォーマルという考えがあるからこそインフォーマルがあるという表裏一体の関係性にあるということが考えられていた。また、一般的な考えとして、一見良いとされるものであっても、過度に取り上げてしまうと悪い方向に進んでしまうということが発生し、「いい塩梅」が必要であるということは理解している一方でそれが見つけられないという現状があるということを認識した。その上で、再度フォーマルとインフォーマルに立ち返ると、この二者も一方に偏ってしまうと、融通の利かない状態になるか、無法地帯になってしまうのではないかという話も上がった。また、教育をこの組織の理論から見て、機会論的組織と有機体的組織のどちらが適切であるのかという議論も行い、その際に出た意見としては、学校単位の大きい規模に関してはある程度の規律が必要なため、機会論的組織が適していると考えられるが、クラスなどの小規模の場合は生徒に寄り添うためにも有機体的組織の方が適しているのではないかといった両方を混合させる意見が出た。

筆者が挙げたこの二回の講義以外でも授業ごとに興味深い議論がなされ、回を重ねるごとに、学生が社会学的な思考力が身につき、議論が活発になっていくのを感じられた。今期の授業を通し、一方的な知識の詰込みではなく、実際に自分の言葉にすることは、より社会学への理解を深め、社会学的な視点を持ついい機会であったと思った。

（文責：学部3年　大石　百華）